

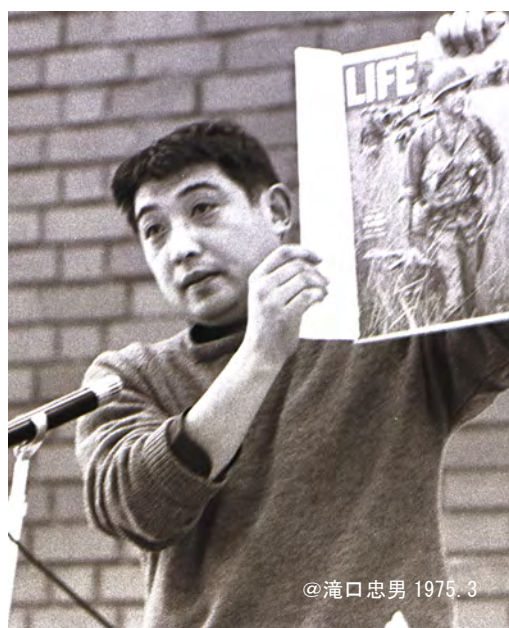
2019.7 岡村昭彦の会 NO.29

写真家 高橋健太郎氏講演 生活図画事件取材して

～治安維持法下に弾圧された旭川の美術運動を検証する～

静岡県立大学国際関係学部教授・同附属図書館館長 小幡 壮氏講演 最初のベトナム戦争として語られる比米戦争

第34回AKIHIKOの会開催



第34回AKIHIKOの会は、2019年3月23日（土）14時から、東京・神田神保町、ブックハウスカフェ・ギャラリーで開催。今回は写真家の高橋健太郎さんと静岡県立大学国際関係学部教授小幡壮さんのお二人に講演をお願いしました。

最初に写真家の高橋健太郎さんは、1941年に北海道の旭川で起こった「生活図画事件」の取材についての話をされました。

高橋さんは平成生まれで、2017年テロ等準備罪法案が成立したのをきっかけに、治安維持法のことを調べはじめ、これは旭川師範学校の先生だった熊田満佐吾さんと、その先生に教わった美術部の学生たちが逮捕された事件で、高橋さんは松本五郎さんと菱谷良一さんに密着取材をしています。

「生活図画」とは、「生活をよく観察し、ありのままを描写して、より良い生き方を考える教育」でしたが、表現が反体制的であり反資本主義的であるとみなされて「アカ」扱いされるのです。

聞き手として登壇した写真史家の戸田昌子さんは、この事件が「生活綴り方運動」に対する弾圧と同じ文脈にあることを指摘し、北海道や山形といった東北地方など生活の厳しかった地域で集中的に弾圧がされたことを紹介しました。

次に登壇した小幡壮さんは、1980年代からフィリピン、特にミンドロ島の山岳少数民族・タジャワンに関する文化人類学的研究を続ける一方で、静岡県立大学附属図書館館長として岡村昭彦文庫（2008年）ならびに岡村資料室（2018年）の開設に尽力されました。

講演では「比米戦争（1899-1902）」が、なぜ語られないのか」という問いについて、約言すれば、アメリカがフィリピンに対して「恩恵的な同化政策」を行ってきた帰結で、実はドゥテルテ大統領は、そのようなアメリカの歴史を清算する公約を掲げて登場したことについて語りました。

また比米戦争が最初のベトナム戦争として語られる背景として、「水責め」や強制収容所作戦における「保護区」の設置といった戦争犯罪行為等、まさに岡村がベトナム戦争報道で注目した歴史上の負の遺産が比米戦争に既にみられること、もうひとつの所以としてフィリピンとベトナムの近現代史を重ねると、「先行ヨーロッパ帝国主義国（西・仏）による植民地化」「民族独立戦争の『勝利』」「日本の介入と撤退」「米の軍事的介入」「ネガティブ・キャンペーン」といった符合が浮かび上がることを指摘されました。

比米戦争という視点から、岡村のベトナム戦争報道のみならず東南アジア現代史について興味深い新鮮な見方を教えられる内容でした。

講演会参加者60名、懇親会参加者27名でした。

生活図画事件を取材して

―治安維持法下に弾圧された
旭川の美術運動を検証する―

写真家
高橋 健太郎

(聞き手 戸田昌子)



Sei Katori

戸田 私は岡村昭彦の会世話人で写真史家の戸田昌子です。今回ご紹介するのは写真家の高橋健太郎さん。2012年に青山学院大学社会情報学部を卒業された平成元年生まれの若い写真家さんで、Andreas Seibertというスイス人の写真家に教わりながら、始めからフリーランスで活動されています。フリーランスということで岡村とも共通点がありますが、高橋さんは2014年に東京都写真美術館で行われた岡村昭彦の写真展をご覧になって強い感銘を受けられたそうです。何度かご覧になったと。

高橋 3回です。

戸田 3回観ていただいたということで、写真を始めた当初に岡村と印象深い出会いをされています。今日お話いただくのは「生活図画事件」という、78年ほど前に起こった事件についてです。写真という、目の前にあるものを撮ることしかできないメディアで80年近く前の出来事取材するというチャレンジングな作品について聞いてみたいと思います。よろしくお願いいたします。

高橋 僕が治安維持法やこの生活図画事件に興味をもったのは、2017年の5月12日に国会の法務委員会です。当時の金田法務大臣がテロ等準備罪に関連して「写真を撮ったりしながら歩くなどの外形的な事情が、場合には実行準備行為となる」と言ったことがきっかけです。端的に言えばこれ

は写真を撮りながら歩くと捕まるよということで、もしこの法案が通れば、写真で捕まる可能性があるということ、治安維持法に関心が強くなったということがあります。

テロ等準備罪は過去3回廃案になった「共謀罪」の名前が変わっただけのもので、取締り対象は一般市民ではないという説明がされていますが、定義がとにかくあやふやです。この共謀罪が治安維持法に近いと言われていたことから、ぼくは興味をもって調べ始めています。そのときに、1941年の9月20日朝に旭川師範学校で起きたこの事件を、ネットで見つけたんです。旭川師範学校の美術部員だった学生たちが突如、治安維持法の目的遂行罪で特高警察によって逮捕されるのです。それが松本五郎さんと菱谷良一さん。松本さんはいま98歳、菱谷さんは97歳ですが、逮捕されたのが1941年9月20日。その前の1月10日朝に、美術部の先生だった熊田満佐吾が特高に逮捕されて、学校による生徒への取り調べが始まっています。

当時は報道されなかったもので、誰もこの事件を知ることとはなかったのですが、特高側や検察の資料のなかに「生活図画教育関係治安維持法違反事件」という名前が正式名称として残っています。これは司法省刑事局の極秘資料で(スライド)、戦後になって見つかったものです。ここには、熊田

先生が旭川中学の上野先生と結託して、「生活図画」という思想のもと、共産主義的な思想を美術部員に植え付けていた、というようなことが書いてあります。松本さんと菱谷さんらが捕まった1941年9月20日からの半年あまりで、全道25名がこの生活図画関連で捕まっていますが、取り調べを含めるともっと多いです。

熊田先生が美術部で教えていたのは単に美しい絵を描くことではなく、社会や生活の実態を観察してそれを描写する、ということで、それが良い生き方を考える指針になる、というものです。これは厳しい寒さの中を、子供達が耐え忍んで農道を歩いている絵。もうひとつは1937年の支那事変のニュースを読んでいる絵です。これは松本五郎さんが当時描いたレコードコンサートの絵で、同期の仲間たちと宿舎でレコードを聞いている。



本間勝四郎『冬近し』1937



稲葉広『事変ニュース』1937

菱谷さんが描いたのは、本を読み合いながら話し合っているというような絵です。

北海道では1940年11月に「生活綴方事件」があつて、全道で100人以上が捕まえられています。熊田先生も1941年に捕まったと言いましたけども、最初は図画で捕まったわけじゃなくて、綴方によつてひっぱられている。図画つていうのは後から出てきたものです。なんで捕まったかというと、生活綴方教育を実践していた横山先生という熊田先生の教え子が、教えていた学校で綴方の実践をしていた。横山先生と熊田先生は手紙のやり取りをしていたものだから、それが特高にわかつて、じゃあ熊田も捕まえようということで、1月10日の朝に捕まえられます。

そして先生が捕まった後に、熊田先生の教え子6人が、学校の取り調べを受ける。「おい、お前ら



松本五郎『レコード鑑賞』1940



菱谷良一『話し合ふ々々』1940

熊田に何教わった、「美術です」と言ったら「嘘つけお前ら共産主義思想を植え付けられていたんじゃないのか」と言われる。でもこの取り調べをしているのは旭川師範学校の教師ですからね。これは怖いことで、特高ではなくて教師が率先して生徒たちを取り調べていくようなことがあったんです。結果、彼らは留年させられ、そのうちの一人、鏡栄さんという方だけが退学にさせられることになって、記念に6人で撮ったのがこの写真です。だから鏡さんだけ帽子をかぶっていません。それでとりあえずあと1年がんばろうということとで写真を撮った。だけど結局彼らは9月20日に捕まってしまう。

こうしたことを僕に教えてくれたのが宮田汎さんという方です。この方が松本さんと菱谷さんに僕に紹介してくださった方です。宮田さんは元高校教師で、僕は彼に色々教わっています。

先ほどの特高の資料の中には、当時、松本さんたちが手紙のやりとりをしたから捕まったという証拠資料があります。「この今の世の中、今の社会は疲弊してしまっていて、それは資本主義社会がもたらしたものだから批判しなきゃいけない」みたいなことが書いてある、松本五郎から菱谷良一に宛てて書かれた手紙があるということが、特高の資料の中にあります。そりゃこんなこと書いていたら彼らも捕まる、と思いたいところですが、



留年・退学になった6人の記念写真、北海道旭川師範学校 1941年3月

実はこれはでっちあげで、菱谷さん、松本さん曰く、特高によって刑務所の中で書かされたのだというのです。それが証拠資料として残ってしまっているのです。だから現在、この資料だけを当たった場合、「こんなことを考えていたんだから捕まってるよな」と思えるような資料になっている。彼らは、そういう国家に対する気持ちは持ち

合わせていなかったのに、特高から共産主義思想を信奉していると書け、そしたら出所させる、と言われたわけです。でっちあげです。

こうした治安維持法に関して2017年6月2日に、当時の金田法務大臣は、質問にこう答えています。「治安維持法は当時、適法に制定されたものでありますので、同法違反の罪にかかります、拘留・拘禁は適法」。だから治安維持法は適法だったと。でも遡れば1976年の9月30日、第78回国会予算委員会ですけど、当時の三木武夫内閣総理大臣は、「治安維持法につきましてはすでにそのときでも批判があった」と言っています。「今日から考えれば、こういう民主憲法のもとに考えれば、これはやはりわれわれとしても非常な批判をすべき法律であることは申すまでもない」と言っているのです。ただ、三木武夫内閣総理大臣は、もうひとつこうも言っています。「当時としては、これは一つの法体系でして、まあやはり当時としては有効だったんじゃないか」と。1976年と言えば岡村昭彦が生きている時代ですけど、当時の尺度で既に治安維持法に関して謝罪したり、保証したりということは、と断言してしまっているのです。ここからは写真を見ながら話して行きます。

戸田 菱谷さんと松本さんはいまも旭川に在住してらっしゃるのですか。

高橋 菱谷さんは今でも旭川在住で、松本さんは捕まって出てきたあと、中標津という、旭川から300キロぐらい東のほうに行って、いまでは帯広に住まわれています。

戸田 二人ともいまでも絵を描き続けていらつしやいますか。

高橋 捕まって出てきたあとはしばらく絵を描いていなかったんですけど、それぞれの人生を歩まれて、定年したり退職されたりしてから、地域の絵描きサークルにまた入ったりして、描いています。

戸田 当時の作品は失われたと。

高橋 そうなんです。さっきモノクロの写真で、こういう絵を描いていたという紹介をしましたけど、あれはなんでモノクロかというと、特高側が証拠資料として絵を全部押収したんですよ。絵だけでなく当時彼らが読んでいた本も、返ってきていません。モノクロ写真で残っているのは、捕まる前年にやっていた展覧会の記録写真で、たまたま写真だけが残っている。本当はこれらの絵もカラーなんです。1940年の写真です。

でも、この事件は過去の出来事なので、今になって僕がいくら写真を撮ろうとしても、当時の問題を撮るわけにはいきません。だから当時の資料と、いまの彼らの生活を照らし合わせて、彼らの生活を撮るということをやっています。それが僕

なりの現代社会への皮肉というか。彼らが生活図画をやったように、僕は彼らの生活を写真で撮る、というようなふうなことを考えてやっています。

戸田 私は写真史を研究しているんですけど、美術や芸術に対しての弾圧と言うと最初に思い浮かぶのが、1941年のいわゆる超現実主義弾圧事件。シュルレアリスム弾圧事件ですね。これは福沢一郎というシュルレアリスムの画家と、滝口修造という日本にシュルレアリスムを紹介した人の二人が、逮捕・拘禁されるという出来事なんです。美術史ではこのことが大きく伝えられています。でも生活図画事件に関しては美術史では知られていなかったもので、興味を持ったということがあります。特に生活図画と言われるものはプロレタリア芸術に近かったために、共産党との関係を疑われたのかなど。これは、言ってみればリアリズム絵画ですよ。シュルレアリスムであれリアリズムであれ、弾圧するのに表現はどっちでもよかったのか。問題は思想的な部分だったんだろうか、ということを考えさせられて、興味をひかれたというのがあります。

もうひとつは、綴方生活運動のこと。綴り方というと、『綴方教室』（1937年）という本があります。東京の葛飾の小学校の先生が、指導した生徒さんたちの作文を集めた本で、その中に豊田正子さんという生徒さんがいます。もともと文

学運動的なところからはじまっていて、プロレタリア文学の大衆化論争とも関係があるんですが、文学をどう大衆化するか、市井の人がどのように文学を実践するのかという問題に取り組んでいる中から生まれてきたのが綴方です。『綴方教室』はベストセラーになって、映画化されていますけれども、それは東京の下層階級のお話なんです。

ところが今回の「生活図画」は、北海道の綴方運動との絡みで摘発されているんですね。綴方の思想に共鳴した先生方が北海道でも綴方教育連盟を作って、ひろがっていつて摘発されたのが「綴方教育連盟事件」です。この時代に、もうひとつ、北方性教育運動というのもあって、秋田などの東北エリアを中心に盛り上がったのも1930年代の後半で、これは東北の話です。

綴方は最初は穏健なところで始まっていて、鈴木三重吉の『赤い鳥』とも関係がありました。それが次第にプロレタリア芸術と近くなる。共産党との関係があったわけではなかったですけど、思想的にはプロレタリア芸術思想と共鳴するものはあって、特に北海道とか東北などの、特に生活が厳しかった地域で、綴方が盛んになって弾圧されるという出来事が起こってくる。そういうなかでの北海道での生活図画の弾圧なので、ここには地方性の問題があるのだらうと思っています。特に北海道は新しく明治になって開拓された地域で、

もともと賊軍側の人たちが多く入植していたということがあって、弾圧が苛烈に進んだのではないかと。芸術が弾圧されるときに、どういう表現が弾圧されたのかということだけでなく、地域性の問題があると思います。

高橋さんに伺いたいのは、生活図画事件で逮捕されたのは、旭川師範学校の生徒たちと先生で全だったのですか。

高橋 熊田先生が勤めていたのは旭川師範学校でしたけど、生活図画を実践していたのは旭川中学、あと旭川商業高校の3つの美術部です。学校をまたいで、旭川美術連盟というのを作ろうとしていたので、旭川中学の美術部関係の方も複数名逮捕されています。

さっきのシュルレアリスムやリアリズムの話に戻りますが、熊田先生は東京美術学校の卒業なんです。現代の芸大です。熊田先生は東京美術学校時代に何をやってたかというところ、築地小劇場とかをまわっていたそうです。そう聞くと、ああ弾圧されて仕方ないなと思う方もいるかもしれませんけど（会場笑い）、熊田先生は、当時、演劇のほうが絵画よりも刺激的だったと。なぜかというと、当時、東京美術学校で教わっていた絵はヌードデッサンだけで退廃的だったというんです。それで自分で外に出て、築地小劇場とか、そういう文化的なところを見てまわっていたんですね。1

930年ぐらいですけど、そのとき日本では、社会主義リアリズムが広まりつつあったときで。その影響を、彼は美校じゃなく外から受けている。そういう広がりがあったもんだから、旭川に赴任して、自分のやりたい美術教育はこうだという考えがあったんだと思うんです。なので、旭川に赴任したときには、東京美術学校でやっていたような綺麗なものを綺麗に描くっていうような美術部の教育を変えようとした。熊田先生は思想的には進歩的だったと思います。

いま僕が撮っているお二人、98、97歳のお二人はもちろん熊田先生の教えを受けていますけど、実際には彼らよりも前の生徒たちの方が、はるかに熊田先生の影響を受けているんですよ。3校の美術部の先輩たちが集まって作った「北風画会」というのがあるんですが、これは機関紙を発行しています。それは熊田先生のアイデアらしいんですけど、そういう活動のなかで、美術を考えることとか、絵を描くとは何かとか、社会とどう結びつくかということに熱心に考えて活動していくことになるので、熊田先生の教え子たちは、必然的にそうなるっていきます。でも、松本さんや菱谷さんはそこまでの影響は受けていなかった。

戸田 この時代は、広い意味での社会批判が弾圧の理由になっていた、つまり資本主義への批判が弾圧の理由になったわけですね。高橋さんに、

具体的にどこが問題だったのかを伺っていくと、こじつけだなんていうぐらいすごい話があつて。例えば、深刻そうな表情をしている人の顔は、「作者が国体変革の意思を表している」とか。あるいは横殴りの吹雪を描いてみれば、「資本主義社会の厳しい現実を、嵐をもって象徴したもの」というような、こじつけで批判されていくわけですね。作品そのものから起こしていく言葉の凄まじさは非常に感じたんですけど。例えば「レコード鑑賞」、これは聴いている音楽がまずい音楽、共産圏の音楽を聴いているのではないかっていうようなことを言われるんでしたか？

高橋 ベートーベンを聴いていけば、「あんな海外の思想を真に受けて」と言われて（会場笑い）。そんなものを描いて啓蒙しようとしたとか、「見た人も啓蒙されて海外の思想に染まっていこう」と言われて捕まるんですよ。熊田先生の詩に「ベートーベンはコミュニストかと、詰問せし特高警部の、心根あわれ」というのがあります。それに、熊田先生は、美術部の教育とは別に読書会とレコード鑑賞会をわりと頻繁にやっていて、これも逮捕される理由になっていくんです。要は組織をつくっていくので。

戸田 集会そのものが弾圧の対象ですよ。この時代は翼賛体制が作られていった時代なので、文学のほうでも、例えば『大東亜』（1944年）と

いう詩集があつて、シュルレアリズム系もプロレタリア系もとにかくみんな大合同して、全員が翼賛的な詩を書かされるということがあります。1940年ごろには詩人たちへの弾圧が激しくなっていて、神戸詩人事件とか、名古屋でも山本俾右という詩人が捕まったり、長野でもリアン事件とか、広島でもありました。全国的にそういったことがあつて、美術でもあるわけです。写真ではシュルレアリスム系の前衛的な写真が自粛させられています。ただ、写真にダイレクトに表現の規制がかかってきたのは、軍機保護法とか要塞地帯法です。軍機保護法は1899年にできた法律で、それが改正されて、最初のころは、せいぜい10メートルより高いところから写真撮っちゃいけないという話だったのが、20メートルより高いところから写真撮っちゃいけない、ビルの窓から写真撮っちゃいけないとなり、カメラ持って歩いているだけで捕まってしまうようになっていきます。

高橋 生活図画は旭川なんですけど、実は他にも似たようなものがあります。ちよつと前にNHKテレビで「想画」という教育の特集があつて。山形と三重と島根で想画教育というのが有名で、そういう美術展があつて、一等賞、二等賞、三等賞をとっていたのがその3か所の学校なんです。これは1930年ぐらいの話です。この「想画」の内容がまさに生活図画のような感じで、自分たちの

身の回りの生活を観察して描く。どういう絵があるかという、例えば農村で働いている自分の親の様子だったり、自分の家の中の生活の様子を、小学生がちゃんと描く、という絵なんですよ。でもこの想画教育は、弾圧されてはいない。なぜなのかはちょっとわからないんですけど。

戸田 この1930年前後というのは「特異児童画」が話題になった時でもあります。特異児童というのは昔の言葉で精神薄弱と言われた人たちのことです。これが話題になるのが1935年ぐらいで、たとえば山下清、「裸の大将」という名前をみなさんご存知と思いますけれども、彼が通っていた千葉の八幡学園というのが特異児童の教育を専門にするところで、そこで描かれた子供たちの絵がメディアに取り上げられて、早稲田の先生が展覧会をやったりします。この時代に「特異児童画」が話題になったのも、おそらく「想画」や綴方も、子供の能力を開発するっていう意味で、もてはやされた部分がある。だから綴方も最初の頃は全く弾圧の対象になっていませんよね。30年代は、非常に集団主義的な美術や教育が盛んで、美術とか文学をやるのが、一般の人のレベルに落ちてくる。才能のある天才が素晴らしい芸術作品をつくるのではなく、どこにでもいる一般の児童や、特異児童たちの創造の可能性が追求された時代だったんですね。だから、教育が熱心になっ

てきた時代なのでメディアでも好意的に受け取られた。例えば羽仁もと子の自由学園とか、新しい教育方法というのが出てきたときですよ。いままでも開発されていなかった一般の人の能力が、美術や文学によって開発されるという考えが30年代に出てきていて、それが最も普及したときに、社会批判や社会の矛盾を追求することにつながっていく。そういうふうに変容したときに、弾圧の対象になっていくっていう、アイロニーを凄く感じる話なんですね。

高橋 ちなみに、山形で想画教育が行われていた長瀬小学校は現存していて、当時の想画の絵は1000点ぐらい残っているんですよ。

戸田 山形には残っているんですね。

高橋 そこで一番メインに教えていたのが佐藤文利という方。その佐藤文利が、国分一太郎と一緒に教育を行っていたんですね。国分一太郎は、生活綴方で有名で、のちに弾圧されてるんですけど、佐藤文利は、何もなく戦中戦後を終えるみたいなんです。

僕に生活図画について教えてくださった宮田さんが言うには、山形の佐藤文利は、北海道の生活図画ともどこか繋がりがあったと。実は資料としても生活図画に関わる人で、熊田先生の手紙の中で佐藤文利先生というのが出てきます。おそらくこれは山形で当時教えていた佐藤文利さんじゃないかと

いかと思うんだけど、はっきりはしない。その佐藤文利さんは、宮田さんいわく、戦中なのか、戦後なのか、思想としては右傾化していたようなんですけど。そこから鑑みると、想画教育は、決して当時の社会とか、自分たちの生活を批判的にみるってことではないんだらうなと思うんです。だから捕まらなかったのかなという。

戸田 ある種、転向というような。

高橋 そうですね。もともとだったのかもしれないんですけど。

戸田 文学でもそうなんですけれども、転向というの、ある日、ある時まで共産主義や革命思想を支持していて、ある時、もうやめましたっていうような単純な話ではなくて、もともと自分のなかに別の要素があって、実はこっちの方へいく予定でしたとか、自分の中で組み替えていくところがありますよね。例えば、シュルレアリスム系の、北園克衛という詩人がいますけど。もともとシュルレアリスムはフランスでは関係者が共産主義に共鳴していたことがあって、日本でもシュルレアリスムは弾圧される理由になっています。北園もそのために戦時中は「郷土詩」を書くんですね。もともとはモダニズム詩とかシュルレアリスム詩を書いていたんだけど、郷土詩。この頃はなにしろ「郷土」がキーワードで、写真のほうでもアヴァンギャルドな写真を撮っていた人たちも「郷土」

がテーマなら弾圧をすり抜けられるということ、キーワードになっていくんです。

つまり、「郷土」という、非常にボンヤリとした、昔懐かしい雰囲気とか、そういうものであれば大丈夫なだけ、地方性とか、もつと言え、過酷な現実の生活をリズムで描くというところにくくと、やっぱり検閲にひっかかってくるということがあって。だから、すり抜けた人もいれば、真つ向から弾圧を受けた人もいて、見当違いなところでそんなつもりもないのに弾圧を受けた人もいるという、グラデーションがある感じがします。

高橋 実際に、治安維持法全体では十万人近く捕まっていた、本土だけでなく、植民地だった韓国や満州だったりします。植民地でもわりと治安維持法で捕まってる人がいるんですよ。どう考えても、その十万人全員が共産主義を信奉していたわけではないですよ。今頃は、その十万人のうちの二人を撮らせてもらっていますけど。もちろん、共産主義だから捕まっていわけではないんですよ。

戸田 そこが問題ですよ。

高橋 「郷土愛」ということで思い出しましたけど、映画の教育をしていた方々は、郷土愛を養うために自分たちの生活を見つめる、という主張だったんですよ。

戸田 なるほど。生活を見つめることのなかから

社会の矛盾を見出すのではなく、郷土愛を涵養するために、そういう表現をするんだっていう。目的の部分ですね。それもまあ、こじつけといえ、こじつけですね。

朝鮮半島の話が出たので、綴方がらみでふと思出したのが、綴方が弾圧されるのが1940年ごろですよ。ちょうどそのころ、高麗映画という会社を作った映画で『授業料』っていう映画があるんですけど、それがまさに綴方をベースにした映画で。朝鮮で日本人の先生が子供たちを指導するんですけど、中に貧しくて授業料が払えない子供がいるという話なんです。仕方がないので子供が親戚を頼って、1日ばかりでがんばって歩いてようやくお金を借りてくる、という綴方が書かれるんです。もちろん日本語で。

その綴方をもとにした映画が発表されて人気を博して、要は「皇国化」ということの中で高く評価された。植民地で綴方が高く評価される一方で、内地では弾圧されていく。だから綴方すべてが問題ということではなく、やっぱり地方性の問題、地域の問題がある。誰を弾圧するかということがはじめから決まっていたという部分もあると思うんですよ。表現そのものじゃなくて、その恣意的な運用というか。あまりにアトラダムでこじつけない弾圧ですからね。ちなみにこの映画は最近まではほとんど知られていなかった映画なんですけ

ど、数年前に見つかってデジタル化されて、東京国立近代美術館のフィルムセンターに入っています。

高橋 早速観たいです。

特高側の話なんですけど、これは宮田さんが監修したNHKの番組で知ったことなんですけど、特高は、捕まえばその分の報酬を得られていたんですよ。1941年は僕が取材している人たちが捕まった年ですが、この年に治安維持法が改正されて、もともと7条だった項目が増やされています。この年には治安維持法で捕まる人の数が増えるので、特高の人たちには報酬欲しさというのはあったと思うんですよ。宮田さんは、特高警察だった人をお父さんに持つ人の話を聞いています。8
そのお父さんは貧しい農村出の人だったんですよ。それが特高警察になって、決して貧しくはない師範学生とか、美術部学生とか、ああいう人たちが弾圧していく。さらには貧しい出の人たち、労働者も捕まえていく。こういう言い方は差別的で嫌なんですけど。貧しい出の人たちが特高になって仕事に邁進するとなると、自分たちと同じような貧しい人を捕まえていくという構図ができてくる。
岡村昭彦はベトナム戦争について、ベトナム戦争はアイルランド系アメリカ人の大統領ケネディがベトナムに戦争を仕掛けて虐げた、という構図を言うんですけど、実はそのアイルランドも、大英

帝国に虐げられていたという話をしていますよね。これは世界中でおきている構図の一つなんだというのを、僕は岡村昭彦から学びました。

戸田 岡村の話が出たので、写真表現の問題も伺いしてみたいと思います。私は『世界』2019年2月号の高橋さんの写真を見て、ある種フォトジェニックというか、絵作りが非常に上手いというか。

高橋 ありがとうございます。

戸田 同時に、目の前にないものを撮るといのは難しいとも感じました。高橋さんが岡村の写真に出会ったのは、写真を撮り始めてそんなに経ってなかった頃ですよ。2014年の東京都写真美術館での展示で、岡村の何にインパクトを受けたのか、せっかくなのでここで伺いしてみたい。

高橋 これですね(「ナイジェリア軍の機関銃に左胸を撃ち抜かれて倒れるビアフラ軍の兵士。ビアフラ、1969年」をプロジェクトクションする)。ぼくがこの展示を何度も見に行ったのは、多分、この写真を見るためだったと思うんですよ。これはほかの写真と全然違って見えたんですよ。後から読むと、岡村さんも、自分は詩人だ、みたいなことを、この写真に対して言及していると思うんですけど、展示を見たときに、まさにそういうようなことを思ったんです。なんかこれ、凄いですよね。



岡村昭彦、ナイジェリア軍の機関銃に左胸を撃ち抜かれて倒れるビアフラ軍の兵士。1969年

戸田 私はこれが、とてもじゃないけど人が死んでいく写真に見えないんですよ。岡村はこれを、人間が土に還る詩を感じた、という言い方をしています。写真の美学と言うと「決定的瞬間」という、モダニズムの美学がありますけれども。これは、今まさに現実、目の前で起こっている何事かを現場でルポするっていう、現場の証拠や記録を

撮っていく、というものです。たしかに岡村はベトナム戦争のときに、「証拠力のある写真」ということを言っていて、何が起きているのか、関係性のなかでそれを証言できるような、そういう写真がよい写真だと言っているはずなんですけれど、この写真に関しては、もうそういう証拠力っていうことではないところで撮っているように思えて。岡村という人は、非常に言葉の強い人だったし、それについて言った人もたくさんいるんですが、でも、この写真には、「証拠力」だけでは説明できないような、詩に近いものを感じてしまいます。

これは岡村が言葉にしなかった、なにかの別の写真の美学があるんだろうな、と私は思っています。

高橋 そうかもしれませんね。

戸田 もうひとつ、前に高橋さんに、岡村の写真を大量にみてもらったときのことなんですけど。

岡村昭彦は写真が下手だった、という神話がありますよね。岡村の会の人ならみんな聞いたことがあると思うんですけど、高橋さんはそのとき、「とてもじゃないけど下手に見えない」とおっしゃっていて。それが私にとって衝撃的だったので、そこからへんもう少し伺いしてもいいですか？

高橋 岡村さんの写真には、色んなものが写りすぎていて、下手だっていうような言説を作られていたと思うんですよ。でも、僕には、その余計なものがないんですよ。岡村昭彦自身も言っ

いることですが、『LIFE』誌に載ったとき、エディターに「あいつは自分の目線から撮っている」と言われたと。自分の目線から撮っている事
がいいんだ、言われるんですね。彼は自分の足で
現場に行つて、自分の目線で撮つて、そのカラー
写真が『LIFE』に載るわけです。

岡村の考える構図は、何か対比できるような、
マイナスなものとプラスなものを一緒に入れて、
それを対比する構図になっていると思います。当
時の写真を撮っていた人たち、いまでもそういう
ふしはあるんですけど、例えばある構図のなかで
はドラマティックな部分しか撮らない。この写真
でいえば、例えば、ここだけを撮るみたいな話で
すよね（兵士の顔のアップ）。倒れていく兵士の顔
だけを撮るみたいなのがいい写真だと思われてい
た時代があったんだと思うんですよ。だけど岡村
はそうじゃなくて、この写真を見る人が、そこに
立つて、この写真、この現場に立つたらこう見え
る、というのを示したかった、と言っていると思
うんです。それを実に上手く、構図で描ききつて
いる、と僕は勝手に感じているんですね。それは
彼のレンズ選びもそうですし、自分がいる場所が
ここだよというのを、見る者にはつきりわからせ
るようにして、広角のレンズを使っているんです。
ちよつとテクニカルな話で恐縮なんですけど、
例えば岡村昭彦も言っていますけど、50ミリや

70ミリ、ズームレンズを使えば使うほど、証拠力
のない写真、主語のない写真になる、と言ってい
ます。それはレンズを変えることに對して言つて
いますけど、当時の岡村昭彦が言っていたことつ
て、いまでも多分、通じると思うんですね。

戸田 自分がどこにいるのか、はつきり分かる写
真ですよ。この場合は草むらに隠れていますよ
ね。頭がとでも出せる状態じゃなくて、とにかく
銃声が響いていて、その中から当然、頭を低くし
て撮らざるを得ない状態。だから手前の茂みも写
り込むし。岡村はこの時、シャッターを切ったあ
と、弾が当たったということがわかった瞬間に、
銃声が一瞬鳴り止んだと言っているんです。その
とき兵士が後ろをぐるっと振り返つて自分の胸を
こうやってひらいてどおつて倒れたというふう
に、文章では書いている。岡村の「主語がある、ない」
ということがこの写真に適用できるかわからない
けれど、少なくとも岡村の目線が間違いなくここ
にあつて、ここにいて、しゃがんでいるつていう
ことが明らかに分かる。

だから、岡村がどこにいるのかがはつきりわか
ります。例えば拷問の写真の場合でも、どこから
拷問を見ていたのかというポジションがわかりま
す。自分と被写体との関係性のなかで写真が撮ら
れていることが、多分、岡村が「証拠力」と言っ
たことに近いのかなと思っています。ただそうい

う写真つて、余計なものが写り込んでいるから、
そういうものは排除して「事実」だけを写してよ、
という、自分自身を捨象するような表現がよかつ
た時代には、無駄なものが多い下手な写真と言わ
れたんだろうなと思うんですね。

高橋 そうですよ。だけど実際に、僕が好きな
写真、僕が見て何かを考えるような写真は、やは
り広角レンズで、28から35ミリで撮られていて。
その場の状況に何が写り込んでいるかを、隅々ま
で見て考えさせるような写真が、見ている人に、
能動的な態度も要求することになると思います。
そこから読み取ってもらう。

戸田 高橋さんは、レンズ選びもやはり岡村の影
響は受けているんですか。

高橋 いやもう、本当に岡村昭彦さんには迷わさ
れまして（会場笑い）。彼はずつと35ミリをキー
レンズだと言っているじゃないですか。僕もずつ
と35ミリをキーレンズにしていたんですけど、
ただ、僕の場合は彼らに近づけば近づくほど、35
ミリじゃ足りなくなってくるんですね。彼らの
生活の中に入っていけばいくほど、もつとフレー
ムの中に余計なものを入れたいつて思えてくる。
それは、レンズを変えざるを得ないということだ
すけど。

戸田 広角が強いものになつてくるつていうこと
ですよ。



菱谷良一『赤い帽子の自画像(1943)』2017年6月20日 高橋健太郎撮影

高橋 そうですね、35ミリをキーレンズとしていたんだけど、28ミリにしたいなというようなことがあって、これなんか28ミリなんですけど。
戸田 岡村はほとんど室内を撮らなかつたですからね。だいたい外で撮っていたので、そんなに短いレンズは必要なかったのかなと思いますけど。どちらを取るかですね。いろんなものをいれこ

んだものを建物のなかで撮るとなると、結局レンズが変わってくるということになると思います。

高橋 そうなんですかね。そんな気はするんですけど。いい例があるが一番いいんですけど、でも岡村さんは、ずっと35ミリがキーレンズでそれを変えた瞬間に主語がなくなるっていうじゃないですか。

戸田 でも岡村は実際にはいろんなレンズを使っていたし(会場笑い)。だからあんまりこだわらなくて良いと思います。教条主義的にならない方が。
高橋 でもね、岡村昭彦が好きだとそうなるって、るんですよ。

戸田 あまりそこらへんはこだわらなくても。

高橋 いやほんとね、おっしゃる通りですよ、本当こだわらなくていいんですよ。

戸田 時間なので、ここで質疑応答にしましょう。

質問 お話ありがとうございました。生活図画事件で、学生が逮捕されたという話を聞いたときに、わたし宮澤事件を思い出したんです。北大の大学生がドイツ人と何かをやりとりしただけで特高に捕まって死んじゃったという話です。それ思い出した時に、じゃあ学生以外の人が弾圧されて捕まったっていうのが、北海道で事例があれば。
高橋 この生活図画関連では、25人が捕まっているんですけど、生徒で捕まったのはあの5人ぐら

いなんです。ほかは教師なんですよ。

質問 学校関連で教育に関わる人たちがほとんどだったんですね。

高橋 わかっている範囲では絵描きさんはいなくて、ほとんど教師だったり卒業生だったりですね。

質問 わかりました。あと、写真の中で、樺太の文鎮の写真について伺えたらと思います。

高橋 お気づきいただいてありがとうございます。この事件について、僕に教えてくださった宮田さんは1937年に樺太で生まれたんです。戦後、樺太からの引き上げるんですけど、そのとき宮田さんのお母様がずっと持っていた文鎮が、樺太の形をしていたんです。これが宮田さんが樺太にいた小学校で描いていた絵です。(会場ざわつく)

質問 ありがとうございます。

戸田 さっきの赤い帽子の写真の解説も是非。

高橋 はい。菱谷さんは、逮捕されて1年3ヶ月間、旭川刑務所において、1942年の12月28日に出てきた後、初めて描いたのがこの絵です。松本さんとともに釈放されるんですけど、留年になつて、学校を退学になっているので、戻る場所がないんですよ。そんな中で、翌年の1943年の2月11日にこの絵を描いています。横に書いてある2月11日は建国記念日で、昭和18年、皇紀2603年なんですよ。そういう日に妹さんの赤い帽子を被って自画像として描いたという。反骨



松本五郎、98歳、2018年7月11日 高橋健太郎撮影

ですね。反骨というか、なんで捕まったのかというモヤモヤとともに、その時代を皮肉るといえるのか、自分が何も言えなかった、自分を皮肉ったのか。社会とか、特高警察の仕打ちに対する皮肉なのか。赤い帽子をわざと被って、それを含めて全部描いた、というのがこの絵なんです。

質問 このプロジェクトは今後どう展開して、どう完結するのかということを伺いたい。

高橋 ありがとうございます。僕は2014年の

夏以降、日本と、日本の戦争に関わっていた人のところに取材に自分で行き始めています。一番最初に行ったのは、ニューギニアなどの戦地に送られた兵士とか。その後、特攻の人とか、「回天」、人間魚雷ですね、そういう方々に取材に行っていたのです。ポートレートを撮って、取材して。

その中で、生活図画の話を聞いて。始めは他の取材と同じような気持ちでポートレートを撮って、取材内容をメモして、というのをやっていたんです。そうしているうちに、こうした資料を何百人、何千人分集めたら、たしかに辞典みたいなものができるかもしれないけれど、それはどうかと悩んでいた。そんな時に「彼らに密着すればいいんじゃないの」と恋人に言われて、そうか、と気づいたんです。彼らが描いていた生活図画というのは、まさに自分たちの生活をみつめることだったので、だから僕も彼らの生活をみつめよう、と思ったわけです。

彼らの生活を記録していけば、この生活図画事件というものが意味でビジュアライズされて、それこそ岡村昭彦の言葉を借りれば、証拠力を持ったものとして残るんじゃないか、と考えた。それで、出版社に持って行って、「これどうにか写真集にしたいんですけど」って言って、「いやわからへんわ」みたいなこと言われて、でもまあ、何度も粘り強く言っているうちに「やってみるか」



菱谷良一、97歳、2018年11月14日 高橋健太郎撮影

みたいなところまで、やっと来たところです。

今回、講演会のチラシにつかった写真、菱谷さんの紅葉の写真ですね、この写真を撮ったときの話なんですけど。実は菱谷さん、すごくお茶目な方なんです。だからあんまり、ああいう不当な事件があったことに対する思いは強くないのかな、70年もたっているから消えているのかな、と感じていたんです。

この写真を撮ったのは、取材に通い始めて1年

半、去年の11月14日です。この日は彼の誕生日だったんですけど、「どこか行きたいところありますか」と言ったら、師範学校、今の北海道教育大学旭川分校、そこに行きたいというので。じゃあ

わかりました、行きましよう、と言うと、菱谷さんが「じゃあ、行くからには事務長と話したいな」と言い始めたんですね。彼は不当な目にあつた後、逮捕されて、釈放されたあとは学校に戻っていないし、一度も学校側の人間とは喋っていないんです。それで事務長に会った時、「俺は菱谷っていうもので、70年前にこういう目にあつただけど、知ってるか」と聞いたんです。そのときの菱谷さんは、僕がそれまで見てきた菱谷さんとは全く違っていて。「いや、こういう目にあつたんだよ、知ってるか?」「いやちよつとわからない、そういう資料あつたかもしれないですね」みたいな事務局長の対応だったんですけど、菱谷さんは「あつたんだよ」ということをすごく真剣に伝えていらした。でも事務室の人に聞いても、結局誰も知らなかったんです。学校史のなかでも、1970年までこの事件のことは出てこないんです。70年以降はちゃんと出てくるのですが、忘れ去られているんです。

その事務長と話した後に敷地をまわっていたときに、ふと菱谷さんが、「なんか肩の荷が下りたな」という話をしたんですね。いま言っていると泣き

そうになるんですけど、70年間の思いつていうのは、やっぱりまだあつたんだなというのを感じて、そこで写真を撮らせていただいたんですよ。

そう考えると、この写真を記録して、ISBNつけて、国会図書館に入れることができれば、すごく価値があるんじゃないかと。出版された暁には、国会図書館に届けられ記録として残るので、今これが必要としている人はもしかしたらいないかもしれないけれども、彼らが実際に弾圧されて、あいう不当な目にあつた、これはやっぱりすごく重いことだったという事実が永久に残るんですね。もしこれを後々に調べてくれる人が現れたとしたら、こういうビジュアライズされたものがあれば、遡ってこういう時代に生きて、絵で弾圧されたことがあつて、普通に生活を送っていたけども、70年の思いはそこまで残っていた。まだ生きてらつしやいますけど、きつと亡くなるまで残っていたということが、後まで残るんじゃないかなと思つて、それでやっぱりこれは本という形で残したいと思つたんです。だからこれは写真集にしたいんです。出版社の赤々舎さんと本を作っています。9月20日が彼らが逮捕された日なんですけど、9月18日から10月1日まで銀座ニコンサロンで写真展が決まったので、それに合わせて出版したいと思つています。これはクラウドファンディングをしたいので、出来るだけ大勢の人に知ってい

ただかないと成り立ちません。なので、きょう来ていただいた方には、もうこのことを知ってしまったわけですから、知ったからにはみなさん避けられないことなので(会場笑い)、是非、どうぞよろしく願ひいたします。(会場拍手)

戸田 きょうはどうもありがとうございます。

【講師略歴】

高橋健太郎(たかはし・けんたろう)

1989年横浜生まれ。2012年、青山学院大学社会学部卒業と同時にスイスの写真家 Andreas Seibert に写真を教わる。2014年12月、その年の春から始めた多摩川を題材にした作品『河床(かしよう)』で写真評論家 Jörg Colberg 主催 Conscientious Portfolio Competition 2014 に選出される。同プロジェクトで2015年、第9回 RPS グラント受賞。2015年に戦後70年を迎えた広島をカラーフィルムで撮影した『HIROSHIMA 2015』が8月6日付 フランスの日刊紙 Le Monde 紙に特集され、その10月に RPS ギャラリーにて個展を開催。2014年からは日本という国と戦争をテーマに取材が続いている。The New York Times、Le Monde、de Volkskrant、Wired、Refinery 29、Bloomberg 等に寄稿。

戸田昌子(とだ・まわこ)

写真史家。東京総合専門学校、武蔵野美術大学講師。編著に『生きること死ぬことのすべて 岡村昭彦の写真』(美術出版社、2014年)がある。

最初のベトナム戦争として語られる比米戦争

—The First Vietnam War
in the Philippines—

小幡 壮

(静岡県立大学教授)



こんにちは。ただいまご紹介いただきました、静岡県立大学の小幡と申します。本日はよろしくお願ひいたします。

既にご存知のことと思いますが、静岡県立大学附属図書館には、岡村さんが生前に集めていた蔵書、約1万8千冊を「岡村昭彦文庫」として収蔵しております。

また、岡村さんが取材のために集めた資料などが、未整理のまま保存されていましたが、このたび「岡村昭彦の会」の方々に整理していただき、岡村文庫とは別に「岡村昭彦資料室」として一般公開する運びとなりました。それを機に、昨年十一月には「岡村昭彦文庫十周年・岡村昭彦資料室開設記念講演会」と題して、シンポジウムを行いました。

資料の整理にご協力いただきました「岡村昭彦の会」の方々にこの場をお借りして、感謝申し上げます。と思います。ありがとうございます。

本日の講演のタイトルについて、まず話したいと思います。昨年十一月のシンポジウムのあとに、「来年三月のAKHIKOの会で、何か話をしていただけませんか」というお誘いがありました。その時は軽い気持ちで「いいですよ」と返事をしたのですが、年が明けて「そろそろタイトルを決めていただけませんか」と正式に依頼が来て、さて何を話したらいいのだろうかと思ひあぐねてしまいました。

私は大学で主に東南アジア関係の講義をしています。専門は文化人類学で、フィリピンのミンドロ島の山岳少数民族の調査をずっとやってきました。

本日の演題は「最初のベトナム戦争として語られる比米戦争—The First Vietnam War in the Philippines.—」です。このタイトルを選んだ理由は、この場が「AKHIKOの会」の集いであり、岡村の仕事而言えば、第一にベトナム戦争をあげなければならぬと思ったからです。何かベトナムとフィリピンを交叉させる話ができないだろうかと考えて、思いついたのがこのタイトルでした。

皆さんは、ベトナム戦争については当然ご存知だと思いますが、そのベトナム戦争に先立つ数十年前、19世紀末から20世紀初頭にかけて、フィリピン諸島を舞台にして、フィリピンとアメリカが熾烈な戦争を行った歴史があります。しかし、この戦争はあまり知られていません。なぜ知られていないかというと、この比米戦争(The Filipino-American War)については、アメリカだけではなく、フィリピンでもあまり語られてこなかったからです。

まず、比米戦争に至るまでのフィリピンの歴史から簡単に説明したいと思います。

フィリピンは、16世紀後半から19世紀の末までスペインに支配されてきました。アジアの多くの国々は、欧米列強によって植民地支配されましたが、そのなかで最も長い間、他国に支配されていたのがフィリピンです。

19世紀後半になって、反植民地運動が盛んになってきます。最初は宗教改革(キリスト教の教会内部の改革)運動から始まりました。スペイン人神父によって独占的に支配されていた教会運営にフィリ

ピン人司祭も参加できるように改革していこうという抗議運動がはじまります。

また、スペインに留学していた進歩的な考え方を持つ学者や学生たちがスペインで改革運動をはじめます。フィリピンではスペイン植民地政府の取り締まりが厳しいために自由な政治活動ができないので、スペイン本国においてフィリピンの独立運動が盛んになっていくのです。

初めのうちは、武力を伴わない小説などの文学的な手段による穏便なプロパガンダ運動だったのです。しかし、19世紀後半になって、先に述べたフィリピン人司祭らが、革命を首謀したとして告発され、無実の罪を着せられて、反逆罪で絞首刑にされるという事件が起きました。このような状況下で、それまで穏便な社会改革を目指していたフィリピン人たちが、この事件をきっかけとして先鋭化していき、武力闘争に発展していきます。武器を持ってスペインと闘い、独立を目指すフィリピン革命戦争が勃発したのです。

同じ時期、アメリカとスペインの間で米西戦争が起きます。キューバが発端です。キューバとプエルトリコは、スペインの支配下にあり、スペインの圧政に耐えかねた住民がアメリカに支援を求めたのです。アメリカは、キューバやプエルトリコをスペインから解放しようとしてスペインに圧力をかけ始めます。それがはるか太平洋を越えて、同じスペイン領であったフィリピン諸島にも飛び火するわけです。この一連の米西戦争は、マニラ湾で火蓋が

切られました。ちょうどスペインと革命戦争を戦っていたフィリピン軍は、アメリカ軍と一緒にあってスペインと戦います。この戦いはあつけなくスペインの降伏で幕を閉じます。この終戦からパリ条約（米西間のフィリピン諸島譲渡の密約）やフィリピン第一共和国の独立宣言、そして比米戦争開始に至るまでの経緯は複雑です。

フィリピンの独立宣言が行われるのは、1898年6月12日です。これはアジアで最も早い民族独立戦争を経ての独立宣言です。その半世紀後にアジアの国々は次々と独立しますが、フィリピンがいち早く民族独立を達成していたのです。

スペイン軍を追い出した後、米軍はキューバと同じように、フィリピン人に主権を与えて撤退するものと思われていたのですが、そのまま居座ります。そしてフィリピンの独立宣言も認めず、無効にしてしまします。その結果、アメリカとフィリピンは戦争状態に入っていきます。それが本日のテーマの比米戦争です。

この戦争において、アメリカ軍はフィリピン諸島で残虐な行為を行います。フィリピンの歴史の中では、あまりこのことが語られてきませんでした。その理由は、アメリカが反米意識を和らげるために、友愛的な同化政策を行ったからです。当時のマッキンリー大統領、それからセオドア・ルーズベルト大統領によって、いわゆる「慈悲深い同化政策」が展開されていきます。

フィリピン人にアメリカ流の学校教育の機会を与え、民主主義的な政治が行われるように国家建設のための政策を展開していきました。

フィリピン人は、比米戦争終結直後はアメリカに対して、激しい憎悪の感情を抱いていました。しかし、恩恵政策の結果、アメリカに対する憧憬の念を強めていき親米国家になっていきます。

ではなぜ本日、比米戦争の話をするのかと言いますと、実は最近フィリピンでは、スペインとアメリカの植民地時代を見直そうという機運が高まってきているからです。

フィリピン人の歴史学者や政治学者、そして政治家たちが、比米戦争をフィリピン人の側から見直そうと発言するようになってきました。

このような背景もあつて、2016年にドゥテルテ大統領が登場してくるわけです。

彼が主張しているのは、植民地時代に経験したフィリピンの不幸な歴史を清算することです。そして、その清算をアメリカに迫っていくことです。それを彼は繰り返し国民に向かって語りかけています。

その彼が先日、国名を変更すると言い出しました。「フィリピン」という国名は、スペインが植民地化した時のフィリペ皇太子にちなんで付けられた名前です。まず、そのフィリピンという国名を「マハリカ」に変えますよ、ということをやドゥテルテ大統領は言い出しました。この「マハリカ」案は、もともとマルコス元大統領のアイディアです。国

名変更は国民投票を経て、憲法を改正しなければなりませんので、すぐには実現できないと思います。

このマハルリカという単語ですが、サンスクリット語が語源で「高貴な生まれの」とか、「高潔な」という意味をもつフィリピン語です。つまり、彼が考えている国名の変更というのは、支配者が名付けた「フィリピン」という国名から、自分たちの言語文化に基づいた「マハルリカ」という国名に変更して、それを名乗ろうということなのです。

2017年の6月12日の独立記念日に、ある下院議員がこういうことを言っています。「真の独立のためには、植民地時代や植民地主義とのつながりを清算して国家独自のアイデンティティを確立しなければならぬ」と。

国名、独立記念日、国旗、あるいは国歌などは国家のアイデンティティと密接に関わり、国民の歴史認識に大きな影響を与えます。

つまり、ドゥテルテ大統領は国名変更を単なる思い付きで言っているのではなく、国家のアイデンティティを確立する、そのような問題として提起しているのです。

独立記念日についても、ふれておこうと思います。フィリピンの独立記念日は現在では6月12日ですが、先ほど述べましたように、これは1898年6月12日に初代フィリピン大統領のアギナルド將軍がフィリピン第一共和国の独立宣言を行った日です。



その後、比米戦争になり、圧倒的な武力でアメリカ軍がフィリピンを平定しました。ルーズベルト大統領が戦争終結の平定宣言するのが、1902年7月4日です。実際には、その後もフィリピン人の抵抗は長く続きます。7月4日というのは、アメリカの独立記念日です。ルーズベルトは、アメリカの独立記念日に比米戦争の勝利宣言をするのです。したがって、この日はフィリピンにとっては屈辱の記念日なのです。

そして、アメリカは1946年7月4日にフィリピンに独立を与えました。フィリピンでは、それ以降、7月4日を独立記念日としていました。

独立記念日を6月12日に戻したのは、1964年のことです。フィリピンにとって、いつまでも7月4日を使い続けることは、「継続する植民地状態」を意味するわけで、1964年にやっと自分たちの真の独立記念日を取り戻したことになります。

先のある議員の宣言の中に「真の独立のためには」という言葉がありますが、つまりフィリピンでは、現在でも真の独立は達成されていないというのが多くのフィリピン人の考えです。経済的に、特に政治的にはアメリカの支配下にあるままだとして、その軛から脱しようとしてもがいているのがドゥテルテ大統領です。

1999年には、比米戦争中のアメリカ軍が行った残虐行為に対してアメリカに正式な謝罪要求を下院議会で行っています。しかし、これに対してアメリカからは謝罪の言葉がありませんでした。

1999年というのは、フィリピン第一共和国が独立して100周年前後の年にあたり、いろんなイベントが行われた年でした。そんな中、フィリピン国会はアメリカに対して比米戦争中の残虐行為に対する謝罪要求を公式に求めたのです。

ドゥテルテ大統領は、植民地時代の負の歴史と対峙して、特にアメリカとの不幸な歴史を清算して、そして新たな時代を切り開くことを自分の使命だ

と考えています。だからアメリカに対して繰り返し激しい批判を行っているのです。

そういうことがあって、ドゥテルテ大統領はことあるごとにオバマ前大統領と対立してきたのです。オバマ前大統領がドゥテルテ大統領の麻薬政策に対して、「人権を尊重すべきだ」と忠告すると、ドゥテルテ大統領は公の場で、フィリピン語のスラングの過激な言葉で反応して、オバマ前大統領を侮辱しました。

この発言が、ビエンチャンで開催された2016年のASEAN会議で行われる予定だった比米首脳会談が突然キャンセルになった理由です。つまり、ドゥテルテ大統領は「人権を尊重せよ」というが100年前にアメリカはフィリピンに対して何をやったのか。まずそれを謝罪するのが先だ」とオバマ前大統領に迫ったのです。

また、ドゥテルテ大統領は施政演説などで、「バラングガの鐘」の返還を要求してきました。このバラングガの鐘というのは、比米戦争のシンボルとも言えるようなものです。

バラングガはサマール島の南端に位置している町です。その教会にあった鐘を返還するようアメリカに求めてきたのです。

この教会の大きな鐘は、アメリカ軍によって比米戦争の戦利品として持ち去られたままになっていました。なぜ持ち去られたかというと、1901年9月28日の早朝、町中にこの鐘が突然鳴り響きます。この鐘を合図にして、フィリピン軍のゲリラ兵

がアメリカ軍の70数名が駐留していたキャンプを襲撃して、そのうちの40数名を殺し、20数名に重傷を負わせるといふ事件が起きました。

この事件をアメリカ側は「バラングガの虐殺事件」としてセンセーショナルに報道します。つまりフィリピン人がアメリカ人に対してこんな残酷なことをした、ひどい奴らだというわけです。

この襲撃に対してアメリカ軍のスミス准将は、「サマール島殲滅作戦」を行います。サマール島を焼け野原にして、一人残らず殺してしまえという作戦を展開していくのです。

ニューヨーク・イブニング・ジャーナル紙の1902年5月5日の社説面で使われたイラストがその作戦の非人道性を物語っています。（左図）



後ろ手に縛られた数人の子供たちが目隠しされ、まさにいま銃殺されようとしています。彼らの後ろにはアメリカ国旗がはためき、その上にはアメリカのシンボルである白頭鷲ならぬハゲ鷲が描かれています。

この銃殺刑の指揮をしたのがスミス准将です。ハゲ鷲の上には、「10歳以上の者は全て殺してしまえ」という殲滅作戦のスローガンが掲げられています。

アメリカ軍はその後、比米戦争の勝利を記念して、この鐘を持ち去ったのです。フィリピン政府の求めに応じて、バラングガの鐘が地元に戻還されたのは、2018年のことです。

そのほかにも、マニラ近郊の村々では村人を一か所に集住させる再定住作戦を行いました。これはベトナムでもやるわけですが、ゲリラと一般住民を区別するために、住民を定住地域に住まわせ、ゲリラとの関係を遮断するのです。

この定住作戦が行われたころ、フィリピンではコレラが蔓延していました。住民を一か所に集住させたために、多くの住民がコレラに感染して死亡しました。1900年初頭、コレラで病死する者や戦死者などをあわせると、フィリピン国民の1割が亡くなったと言われています。

また、スペインが植民地支配を確立することができなかったミンダナオ島でも、アメリカ軍は平定作戦を展開していきます。スペインの支配が及ばなか

ったのは、この島には強固なイスラーム王国があったからです。

現在、アメリカは世界中でイスラームと敵対していますが、その発端はアメリカがミンダナオ島で行ったモロ・イスラーム戦争なのです。

この戦争では、まさに悲惨な戦いが繰り広げられました。例えば、スールー諸島にあるホロ島の「ダホ山の戦い」では3日間で数百人が虐殺されたと言われています。

この戦争に従軍した米軍兵士たちというのは、あの「ウンデット・ニーの戦い」に従軍した兵士たちなのです。アメリカで最後まで抵抗していたインディアンを虐殺した1890年の悪名高い戦争です。つまり、ここで繰り広げられたのは、まさに「異民族」を殲滅する戦争です。インディアン（ミンダナオ原住民）を殺せ、イスラーム教徒を殺せ、というジェノサイドがミンダナオ島で行われたのです。

このようにフィリピン全土を戦場にして非常に残酷な戦闘行為が行われました。これが、The First Vietnam と言われる所以です。

ベトナム戦争でも水責めの拷問が行われていますが、これはもともとスペイン軍がキューバで最初に行いました。キューバの反乱軍にやっています。塩水を無理やり飲ませて、膨れた腹の上に飛び乗るのです。このような人道に許されない残酷な拷問をアメリカ軍はフィリピンで行い、またベトナムでも行ないました。

捕虜強制収容所、保護区として村を作ってゲリラと一般住民を分離する再定住政策、それから殺し尽くして焼き尽くす焦土作戦などは、まさにアメリカ軍がその後ベトナムで展開していく作戦なのです。このことを称して、Luzviminda Francisco が1973年にフィリピンは、「最初のベトナムだ」と「The First Vietnam: The Philippine American War, 1899-1902.」(The Philippines: End of an Illusion 2, no. 2) のなかで言う始めました。その後、いろんな人たちが、「The First Vietnam」と言い出し、そして日本研究者も「最初のベトナム(戦争)」と言い始めたのです。

フィリピンの歴史の流れと、ベトナムのそれは非常に似ています。両国は欧米帝国主義国によって植民地化されます。ベトナムはフランスによって、フィリピンはスペインとアメリカによってです。そして、その植民地支配国と独立戦争を行います。それがフィリピンでは、フィリピン革命戦争と比米戦争であり、ベトナムでは抗仏戦争です。

その過程で日本は表裏両面から介入しています。その関与は最終的には失敗に終わり、フィリピンやベトナムに挫折感を与えてしまっています。例えば、革命戦争に引き続き比米戦争を指揮していたアギナルド將軍の命を受けた同志たちが、来日して支援を要請します。そのとき、「布引丸事件」というのがありました。これは明治政府が表立って支援できないので民間人の宮崎滔天らが暗躍して、布引丸という中古船を買い取り、アメリカ軍と戦っているフィ

リピン軍に武器を輸送するということがありました。

ただし、この船は途中で嵐にあつて沈没してしまふのです。その後、フィリピン軍に対する日本の援助は途絶えがちになり、そして日米同盟に基づき、アメリカ政府から日本にいるフィリピン人活動家を取り締まるようにとの要請がなされ、日本はこれ以降、表立ってフィリピン軍を援助できなくなってしまう。

同じような歴史は、ベトナムにもあります。ファイン・ボイ・チャウが来日して、ドンズー運動を展開していきます。しかし、これもやはり日仏協約によって取り締まりが厳しくなり、チャウは失望のうちに帰国してしまいました。

最後に、アメリカによるフィリピンとベトナムの両国に対する執拗なネガティブ・キャンペーンについて付け加えておきたいと思います。

アメリカは自分たちが行った戦争は正義の戦いだったとして正当化を試みます。ベトナムの非を指摘し、そしてフィリピン革命には否定的な評価を下すことで自己正当化を試みるのです。

ベトナム戦争終結後に、カンボジアにベトナム軍が侵攻すると、アメリカはベトナムのネガティブ・キャンペーンを展開しました。「それ見たことか、ベトナムは帝国主義的な姿を露わにした」と言うわけです。「独立」と「自由」を目指して戦ったベトナム民族の戦争を、カンボジア侵攻を論って否定し

て、ベトナム戦争における自らの軍事介入を適及的に正当化しようとしたのです。

フィリピンでは、革命戦争で植民地支配者スペインを追い出して、独立革命を達成したにもかかわらず、それをアメリカは認めず、スペインに代わって植民地支配を行ないました。この独立革命と第一共和国の成立をめぐる、アメリカとフィリピンの歴史学者の間で論争が続いています。

フィリピン人の歴史学者は、スペインとの革命戦争を経て第一共和国を樹立した意義を強調します。しかし、アメリカ人の歴史学者はその「革命」性に異議を唱えて、フィリピン革命とその後の第一共和国樹立を評価しようとしません。

つまり、フィリピン革命は民衆による革命ではなく、エリート層がスペイン人を追い出して新たな支

配者層になり、そして無知なる大衆を搾取する支配者の交代劇でしかなかった、とアメリカの歴史学者はネガティブな解釈をするのです。

その無知なる大衆に恩恵的な政策に基づいて学校教育の機会を与え、民主主義的なフィリピン人を育成したのがアメリカである。それ故に、アメリカの植民地支配下にあった30数年間の対フィリピン政策は、まさに正しい植民地政策だったと自己を正当化します。

このように、フィリピンとベトナムの歴史はいくつかの共通点があります。アメリカが帝国主義的な性格を強めていき、建国の理念が大きく揺いだのが、比米戦争であり、ベトナム戦争でした。ベトナム戦争の原点は比米戦争に求めることができます。比米戦争は、まさに最初のベトナム戦争だったので

す。最後にこのことをお伝えして、本日の講演を終わりにしたいと思います。

どうもありがとうございました。

【講師略歴】小幡壮(おばた そう)

1955年岩手県一関生まれ。人類学者(文化人類学・東南アジア文化論)。立教大学講師、女子栄養大学研究員、静岡県立大学国際関係学部助教授などを経て、現在、同大学国際関係学部教授・大学院国際関係学専攻教授・附属図書館館長。

1980年代からフィリピンの少数民族、特にミンダロ島の山岳少数民族・タジャワンに関する文化人類学的研究を継続しておこなっている。彼らの世界観を映し出す口頭伝承や儀礼に興味を持っている。最近では、東南アジアの文化に興味を持っている学生たちと一緒に東南アジアの各地に足を運んでいる。

佐藤純子さんのあいさつ

こんにちは、函館から参りました岡村昭彦の長女の佐藤純子と申します。本日はお集まりいただきありがとうございます。高橋さんのお話は旭川市で起こったお話だったので興味深く聞かせていただきました。いい本ができればいいなと思っています。小幡先生にも有難うございました。父はベトナムの写真を撮っていましたが、それ以前の歴史は全く知りませんでした。静岡県立大学に去年岡村昭彦資料室もできました。いつでも入れるということです。皆さまご覧になっていただきたいと思います。また今後資料室に私が持っている資料も大学側とも相談しながら加えていきたいと思っています。それにつきましては皆さまからもうこういう資料をなどと、ご意見をお聞かせ下されば幸いです。

他のことになりましたが、4月13日から5月一杯、札幌の北海道文学館で初めて加清純子さんの展覧会が開催されます。父とも交流があった方なので、函館文学館に入れている父の資料も何点か展示しています。講演会なども開催されますので、もし北海道にお越しになる機会があったら覗いてみてください。またお知り合いの方にもお知らせください。

もう一点、昭和29年9月の洞爺丸事件の折、父が被災者の救援に当たっていたことは母から聞いていたのですが、去年、「岡村昭彦さんに助けられたと父がずっと言っていた」という話を、息子さんがまとめて小冊子にしてくださいました。父が渡島当別トラピスト修道院に入り母と出合った頃です。父の前向きに一生懸命生きていた時代が分かって嬉しかったです。



事務局からのお知らせ

1. 「シャッター以前」7号 原稿募集

(没後35周年号、20年3月刊行予定)

*特集 自主ゼミの時代(仮題)

岡村ゼミの方法論を繋ぐ参加者による対談ほか

*募集テーマ

岡村昭彦に関するエッセイ・論(2000字〜4000字程度)

岡村資料の発掘、岡村文庫・資料室に関する論考・感想等どなたでも応募大歓迎

*原稿料無料

*原稿締切 19年12月10日

(なお採用に関しては世話会に「一任ください」)

2. 「岡村昭彦資料室オープン」

昨年11月11日静岡県立大学附属図書館に待望の「岡村昭彦資料室」がオープン。「岡村昭彦文庫」が10年前にオープンしたあと、未整理のまま残されていた段ボール50箱分千数百点の資料は、取材先で入手した資料及びコピーと新聞切り抜きで、ベトナム戦争関連、精神医療、電源開発など広範囲に及ぶ。

今回の整理では、大分類は「戦争・世界史」「環境」「バイオエシックス」「その他」「アキヒコ」の5分野、中分類は23分野、小分類は154分野の分類となった。

アキヒコの手による「重要」のメモのついた戦

前・戦中の貴重な資料もある。大分類「アキヒコ」は、未発表の自筆原稿に加え、書きかけメモ・ベトナム語を勉強した時のノート・没原稿・講演関連資料などに加え、没後の記事やテレビ番組のビデオも含んでいる。大分類「環境」にはアキヒコが漁民と一緒に闘った「西部衛生工場」「西遠流域下水道」反対闘争の関連のデータや裁判資料もある。

今後、岡村文庫と資料室は学生の学習・研究の場であるのももちろん、静岡県民の研究の場、若きジャーナリスト・写真家の「シャッター以前」を培う場として活用されることが期待される。

なお、新聞切り抜き段ボール箱5箱分は未整理のまま残っており、残された課題である。

3. 岡村昭彦関連著書案内

『われわれはいま、どんな時代に生きているのか 岡村昭彦の言葉と写真』 戸田昌子編

(岡村昭彦の思想への「入門書」。カラーモノクロ写真50点以上挿入)



赤々舎

2019年8月刊行予定

4. 「没後のアキヒコ・オカムラ」資料編

2018年

11 はこだて十字街だより 第301号(平成30年

2019年

11月号) 岡村昭彦資料室開設記念講演会のご案内
12・14 静岡新聞 県立大に「岡村昭彦資料室」

1・16 静岡新聞 黒潮

1・28 北海道新聞(夕刊)函館の文化を支えた9冊

3 メディカルはこだて 69 岡村昭彦の資室

静岡県立大学付属図書館に開設 栄文堂書店

佐藤純子

4・13 北海道立文学館発行「よみがえれ!とこし

えの加清純子 画と文と」

*記事の詳細・新聞記事・書評などは「岡村昭彦の会」のホームページから読むことができます。

5. 転居なさった方や会からの会報や3月の「AKHIKOの会」の案内等が不要な方へ

転居で住所が変わられた方、今後会報や案内が不要の方、お手数をおかけしますが、ご一報くださいますようお願いいたします。メールでも結構です。

『岡村昭彦の会 会報』第29号(2019・7・10)

発行 東京都江戸川区西小岩五―十一―二十七

戸田徹男方「岡村昭彦の会」事務局

TEL&FAX 03-3657-8380

口座番号「00170-6-615123」

加入者名「岡村昭彦の会」

*メールアドレス akihiko-no-kai@kazekusa.jp